

ふらっとふらわーず ニュース

- 発行：ふらっとふらわーず
- 2020秋号：第32号
- 連絡先：042-315-4158
- 編集委員：内田信子

- 季節の花：ムラサキシキブ
- シュウメイギク
- コラム：暑さ寒さも彼岸まで
- 情報：花のイベント

季節の花

★「ムラサキシキブ」

クマツヅク科 / ムラサキシキブ属

ムラサキシキブは日本、中国、台湾、朝鮮半島に分布する落葉性の低木で、樹高は2m〜3mになります。秋に光沢のある**紫色の小さな果実**を葉の付け根あたりにまとめてつけるのが一番の特徴です。赤い実をつける日本の樹木は多いですが、紫色の果実をつけるものは少ないでしょう。別種に丈が低い**コムラサキ**があり、庭木として広く普及しています。**コシキブ**とも呼ばれます。コンパクトに収まって場所をあまりとらず、果実もみっしりと付いてボリュームがあり美しいので、庭木としてよく植えられるのは、**コムラサキがほとんど**です。園芸、とりわけ庭木では**コムラサキ**を指してムラサキシキブと呼ぶことも多いです。ムラサキシキブには変異が非常に多く、代表的なものに**白い実**をつける**シロシキブ**があります。花はいずれも淡い紫色で、**開花時期は6月〜7月頃**です。



ムラサキシキブの実



コムラサキの実



コムラサキの花



ムラサキシキブの花



シロシキブ



「むらさきしきみ(紫敷き実)」や紫色の実が茂るという説。もう一つは、江戸時代の植木屋が平安時代の**女流作家「紫式部」**になぞらえて付けたという説もあります。

ちなみに江戸時代の初期にはまだ**ムラサキシキブ**の名はなく、「みむらさき(実紫)」「たまむらさき(玉紫)」と呼ばれていました。コムラサキの別名のコシキブは平安時代の女流歌人、**小式部内侍(こしきぶのなむら)**にあやかって付いたとされます。

◎ **花言葉**：「愛され上手」「上品」「聡明」(花言葉辞典)
(参考：森と水の郷あきた、ヤサシイエンゲイ、趣味の園芸)

★「シュウメイギク」

キンポウゲ科 / イチリンソウ属

シュウメイギクは秋の風情を感じさせる優雅な花で、切り花をはじめ、花壇や鉢植えに広く利用されています。漢字で書くと「**秋明菊**」秋まっさかりな時期に開花する名前通りの花です。わが国へは古い時代に中国から入り、**京都の貴船地方**に野生化したものが見られます。これが**キブネギク**で、本来のシュウメイギクです。ただし、現在は類似のいくつかの種や、これらの交配種も含めて、**総称的にシュウメイギク**と呼ばれています。早春に咲くイチゲの類と同じ**アネモネ**属の植物ですが、性質はかなりの異なり、半常緑性の大型の多年草で、地中の根は長く伸びて、いたるところから不定芽を出してふえます。夏の終わりのころから**花茎が伸び出し**、先端にまず1輪、そしてその両脇に1輪ずつ、さらにそのわきと



キブネギク



キブネギク



白花八重咲き



桃花一重咲き

いうように順に花を咲かせます。英語では**ジャパニーズ・アネモネ**と呼ばれます。花びらのように見えるのは**萼片**(がくへん)で、花弁は**退化**しています。開花後は綿毛に包まれたタネが実りますが、品種によってはタネの大きなものもあります。

育て方：
栽培環境：根は高温や乾燥に弱いので、地温の上昇を防ぐとともに、株元には直射日光が当たらないようにすることが大切です。**水やり**：鉢植えは、水切れすると葉が枯れやすいため、土の表面が乾き始めたらずめに水やり。
肥料：春と秋に、月1回の置き肥、または月3回ほど液体肥料**ふやし方**：春か秋の株分け。根伏せ(根を長さを5割ほどに切り、鉢か育苗箱に横に寝かせて土をかぶせます)。

◎ **花言葉**：「忍耐」「多感なとき」(花言葉辞典)
(参考：趣味の園芸、ヤサシイエンゲイ)

「コムラサキ」

「暑さ寒さも彼岸まで」

「暑さ寒さも彼岸まで」1. **夏の暑さは秋の彼岸のころには和らぎ**、冬の寒さは春の彼岸のころには和らぐ、などの意味の慣用句。(実用日本語表現辞典) 2. 彼岸になると暑さも寒さも和らぐといふことから、**どんな困難な事態でも、あきらめを過ぎれば峠を越える**といふこと。また、それまであきらめず(耐えれば)、**解決する**といふこと。(ワークブック) arry 日本語版) という通の意味があるようです。お彼岸とは、「先祖のたまや自然に感謝をよびける仏道精進の期間で**日本独自の仏教行事**」です。



古くは**聖徳太子**の頃から始まったともいわれ、古い記録では「日本後記」に崇道天皇(早良親王)の供養の為に諸国の国分寺の僧を集め、法要をしたことが記され、**お彼岸のはじまり**とする説もあります。農耕文化の日本では古来より、**昼夜の時間が同じで、真東から太陽**がのぼるこの時節に、自然の恵みに対する**感謝をささげる風習**があり、これらに仏教の教えが結びついたと考えられています。「彼岸」という言葉は、サンスクリット語「**パーラミター**(波羅蜜多)」「の漢訳語**「到彼岸」**からきています。仏教で「彼岸」とは向こう岸に渡るという意味です。迷いのこの世(此岸)が()から、川の向こうの**悟りの世界に渡る**ために教えを守り、行いを慎むのが本来の彼岸の意味です。



マダムバタフライ



リコリス・スプレングェリ

秋のお彼岸の頃に咲く「**ヒガンバナ**」。この名前は、**秋の彼岸**のころには、毎年決まって**花が咲く**ことがきたものです。ヒガンバナは**リコリス**という**アルカロイド**を含んでおり**有毒**です。そのため、**獣除けに墓場**に植えられたり、また**モグラ除け**のために**水田の畦**に植えたりもしました。そのせいか、日本では**縁起の悪い花**と言われることがありますが、そのような先入観がないアメリカやヨーロッパでは、「**リコリス**」として、栽培される植物で、リコリスはギリシア神話の**海の女神**の名前に由来するそうです。古くは園芸用で、日本や中国から輸出されていました。ヒガンバナの球根には**重量の10%のリコリン**が含まれます。有毒植物なので、**丹念な毒抜き**が必要だったようですが、**食用**とされていました。「**曼珠沙華**」と呼ばれることもありますが、これは古代インド語で、「**天上の花**」の意味だそうです。ヒガンバナは、**球根に養分を貯えて**、秋の彼岸のころになると、球根は夏の眠りから覚めます。開花の適温は**20度〜25度**といわれています。

9月も半ばになると、朝夕の気温がそのへんになるとなる日が多くなり、体内時計も反応するようになるといいます。**日陰**の涼しいところでは早く咲き、陽の強いところでは遅れます。**開花**という大仕事を終えると、まもなく葉を伸ばしてきます。気温が下がって周囲の雑草が枯れてくると、**おどろきのエネルギー**をたっぷり葉に蓄積することができそうです。

(参考：ヤサシイエンゲイ、城下農園、曹洞宗近畿管区教化センター、e-butsumiji.jp)



情報

(事前にご確認ください)

- 第53回水戸の萩まつり
- 9月5日(土)〜7日(日) 茨城県 水戸偕楽園
- コスモまつり
- 9月12日(土)〜10月25日(日) 国営昭和記念公園
- 三溪園 菊花展
- 10月26日(月)〜11月23日(月)・祝(三溪園
- 高幡不動尊 菊まつり
- 10月下旬〜11月下旬 高幡不動尊